

Title	アメリカ人大学生の日本語学習とエスニック・アイデンティティ : 日系アメリカ人4世のライフストーリーを中心に
Author(s)	中橋, 真穂
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/52093
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (中橋真穂)

論文題名

アメリカ人大学生の日本語学習とエスニック・アイデンティティ
—日系アメリカ人4世のライフストーリーを中心に—

アメリカ合衆国において、かつて日本語は「ミステリアスな言語」、高度経済成長期には「就職に有利な言語」（国際交流基金 2008）というように、日本語学習者の増加要因は時代と共に移り変わってきた。2014年現在、1980～1990年代にみられた日本語ブームは落ち着き、日本語教育機関数は1998年をピークに減少しており、学習者と教師の数も2003年から初等・中等レベルで減少傾向にある(Watanabe and Lin 2006)。一方で、従来の学習要因に加え、ゲームやアニメといったサブカルチャーや現代文化に強い興味を示す学習者の増加など日本語学習者の多様化が進んでいる（国際交流基金2013）。

そういったなか、「自分のルーツ探し」として大学などで日本語を学ぶ日系アメリカ人も少なくない。日本人がアメリカ合衆国へ渡ってから100年以上経った現在、日系アメリカ人は、世代交代を経て次第に日本とのつながりが薄れ、アジア系アメリカ人化しているといわれている（ルークス 2004）。しかしそれとは対照的に、日本語や日本文化継承に励む若い世代の日系アメリカ人の存在も確認される。日系アメリカ人は日本語を日本人と定義する最も重要な文化的マーカーの1つとして位置付け、日系としてのエスニック・アイデンティティ形成に重要な要素を占める（竹沢1994）ことから、日系アメリカ人としてのエスニック・アイデンティティと日本語学習は密接に関係していると考えられる。

そこで本論文では、カリフォルニア州にあるS大学で日本語を学習する日系アメリカ人4世を中心にインタビューを実施し、非日系アメリカ人との比較を通して周辺環境やエスニック・アイデンティティ、日本語学習との関係、さらに、日本語学習を通じた周辺環境やエスニック・アイデンティティの変化をライフストーリーを中心に考察した。そしてそこから、まだ比較的研究や報告の少ない日系アメリカ人4世の実態を彼らの視点から明らかにし、理解を試みた。

第2章では、調査協力者を社会的文脈の中で理解するため多文化社会アメリカの歴史、政策、日本語の位置づけ、学習者数、日本語学習動機を調査データや先行研究から概観した。そして、特に日本にルーツを持つ日系アメリカ人を取り上げ、歴史や世代別の行動様式や意識に着目したEIQ(Ethnic Identity Questionnaire)、本調査の中心となるインタビュー調査、ライフストーリー法について触れる。

これらの背景をもとに、第3章以降、4つの調査を実施した。第3章では、本研究のフィールドであるカリフォルニア州のS大学がある中学校2校で「アメリカの中学校の異文化理解教育に関するアンケート・インタビュー・フィールドワーク調査」を実施、言語政策や異文化理解に対する取り組みの実際を概観し、これらの教育を受けた生徒の異文化に寛容な態度を明らかにした。

第4章では、S大学にて日本語を学習する大学生に対し「日本語学習動機に関するアンケート調査」を実施した。結果、13の因子が確認され、「将来の進路のツール」「視野、教養を高める手段」「日本のポップカルチャーへの興味」「日本語の言語自体への興味」「英語以外を話すことへの価値づけ」などの10項目に大別、動機づけの傾向について量的調査から明らかにした。

そして、この結果から特に日本語学習とエスニック・アイデンティティとの関係が強く表れた日系アメリカ人4世を取り上げ、第5章では、「日系アメリカ人の世代別特徴に関するEIQ (Ethnic Identity Questioner) 調査」を日系アメリカ人4世に対し実施、3世以前に比べ行動様式や価値観においてアメリカ化が観察される一方、日本語・日本文化継承には肯定的など、世代間の行動様式や価値観の変化について多角的に検討した。

第6章では、「S大学の日本語学習者に対するインタビュー調査」を、日本語学習経験のある非日系アメリカ人と、日系アメリカ人4世に対し実施した。

これらの調査から第7、8章では、日系アメリカ人4世／非日系アメリカ人の周辺環境、日本語とエスニック・アイデンティティの関係などを当事者視点で明らかにし、ライフストーリーをもとに分析、理解を深める。

第9章では、日系アメリカ人4世と非日系アメリカ人の比較や、第4章の動機づけに関するアンケート結果と併用し考察を進めた結果、日本語学習動機や学習過程、教師の捉え方に、日系アメリカ人と非日系アメリカ人で違いが認められ、それらにはエスニック・アイデンティティが影響していることが明らかとなった。さらに、多文化社会の中でエスニック・グループを越えた幅広い交流や異文化への寛容な態度が観察され、それぞれのエスニック・アイデンティティは「個性」として尊重されながら、時と場合に応じた流動的なエスニック・アイデンティティを構築していることが認められた。つまり、持ち合わせている行動様式や「血」、使用言語などで区別し理解しようというのではなく、重要なのはどういったネットワークに身を置き、自分を何者と捉え理解するかという意識の部分にあるといえる。そしてこのような意識形成には、現在のアメリカの多文化社会や、それらを背景にした異文化理解教育が要因であると考える。

これらを踏まえ、日系アメリカ人4世の実態についてまとめ結論とする。4世の特徴として多文化社会のもと混血が進むにつれ日系アメリカ人のアジア系アメリカ人化がいわれている。この意識はすでに3世の代に始まっているが、その意識の高まりは4世において、加速の一途を辿っているといっていいただろう。その要因として、第1に、「血」の問題が考えられる。外婚が進むことにより日系以外のアジア系の血を生まれながらに持ち合わせることによるアジア系アメリカ人化である。第2に、「意識」の問題である。1960年代のイエロー・パワー運動から始まったアジア系としての連帯が、今日では日常レベルでも見受けられ、中国系や日系といった個別のアイデンティティよりも「汎エスニシティ」（森茂 1999）という意識的な部分があるといえる。

3世の代から始まったこのアジア系アメリカ人としての連帯だが、本研究では、3世と4世ではその現象が持つ要因において大きく異なる点があると分析する。3世のアジア系アメリカ人としての連帯は、「怒り」を源にしたものである。特に親の世代までが過酷な差別に合い、自身もなんらかの差別を受け、これまで抑圧されていたものがブラック・パワーに続き爆発した。アジア系アメリカ人との連帯も、差別を受けた暗い過去をもつ共同体としての連帯の意味合いが強い。3世のルーツ探求、エスニック・リバイバルもまた、過酷で理不尽な過去を知り、社会に訴えるといった一連の運動から高まった意識、連帯感をもととなり始まったものと考えられる。これは、3世が鋭く社会を刺す「蜂」に例えられることにも表れている。

一方、4世は、生まれた時から日系アメリカ人の地位は確立され、なりたい職業に就く選択肢を与えられている。また、多文化社会のもと、異文化理解教育を幼少期から受け、多様性を認め、自身のルーツを誇りに思う心を育ててきた。さらに、English Plusに代表されるように、英語以外を話すことへの肯定感、異文化を持ち合わせていることへの羨望といった社会の傾向が背景にある。そのようなあらゆる面での心の余裕が生まれた中、本当の意味での日本とのつながりの希薄化もあり、ルーツ探求へと向かわせた。そしてこのルーツ探求は、抑圧された過去を振り返り権利を取り戻すための運動とは異質の、より平和的で純粋な興味によるものと分析する。アジア系との連帯もまた、3世が白人に対抗するための連帯だったのに対し、4世にとっては異なるエスニック・グループとの交流を通しての連帯感であり、外婚などから先に述べたように「血」、「意識」両方の面でアジア系アメリカ人化は進んでいるといえよう。

ただし、アジア系アメリカ人化とは、決して「日系→アジア系」といった一直線上の一方通行の変化ではなく、日系アメリカ人に関わらず、彼らは様々な社会的文脈の中で、時と場合に応じた複数のエスニック・アイデンティティを持ち合わせており、何かのきっかけ、例えば、日本語学習を機に日系人としてのエスニック・アイデンティティを強く意識するといったような、新たなアイデンティティの構築という可能性をも含んでいる。

そして文化や言語の面でも、決して消滅の一途を辿っているわけではない。1970年代、Herbert Gans (1979) は、ヨーロッパ系移民3世以降の人々が自らのエスニック・ルーツを表現することを「象徴的エスニシティ (symbolic ethnicity)」とした。本調査協力者である日系アメリカ人4世の日本語学習や日本文化継承も、日本とのつながりの希薄化、アジア系アメリカ人化が言われるなか、日本語をはじめ、太鼓、ヨサコイなどに関わることで彼らが日系アメリカ人であることを象徴的に示す、もしくは自己に意識付ける手段であると分析する。

以上、多文化社会のもと、それぞれ尊重し合いながら幅広い交流をし、その時々々の文脈に応じた複数のアイデンティティを構築し操りながら社会を構成していること、そして日系アメリカ人4世も、4世という立場の曖昧さを感じ日本語や日本文化を通してルーツを模索しつつアメリカ社会に個性を彩っていることをライフストーリーを中心に当事者視点から多角的に明らかにした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (中 橋 真 穂)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	教授	伊勢 芳夫
	副 査	教授	村岡 貴子
	副 査	准教授	西村 謙一

論文審査の結果の要旨

中橋真穂氏の研究の原点にあるのは、アメリカの大学において日本語を学習するアメリカ人学生の学習動機を解明したいという思いであった。そこから量的調査、及び、質的調査を通して日本語学習動機を解明する研究を行うわけであるが、本論文のユニークな点は、アメリカ人の日本語学習動機の研究を、アメリカの歴史や社会構造、文化及び言語政策と接合させて展開していったところにある。

本論文は9章から構成されている。

序論である第1章につづいて、第2章においては、人種差別や強制収容所と行った苦難を経験しながら「モデル・マイノリティ」として社会的地位を確立していく100年以上にわたる日系アメリカ人の歴史を辿るとともに、アメリカの言語・文化政策の変遷、日本語教育の実情、そして日本語学習動機を調査データや先行研究から概観している。これらの概観をもとに筆者は4つの調査を実施しており、第3章では、アメリカの中学校2校での異文化理解教育に関するアンケート・インタビュー・フィールドワーク調査の結果とその分析を詳述し、第4章では、アメリカのS大学での日本語を学習する大学生に対して行った日本語学習動機に関するアンケート調査結果について述べている。第5章では、日系4世アメリカ人に対してS大学で実施したEIQ(Ethnic Identity Questionnaire)調査結果と、先行研究の3世までのEIQ調査結果を対照して、世代間の行動様式や価値観の変化について多角的に検討している。第6章では、S大学で日本語学習経験のある日系アメリカ人4世と非日系アメリカ人に対する半構造化インタビュー調査の実施対象者や方法について詳述し、そのデータから、第7章では日系アメリカ人4世4人について、第8章では非日系アメリカ人5人について、それぞれのライフストーリーを構築し、分析することによって、彼らの周辺環境、日本語とエスニック・アイデンティティの関係などを当事者の視点から明らかにした。第9章では、第4章の日本語学習動機に関するアンケート結果と照らしながら日系アメリカ人4世と非日系アメリカ人のライフストーリーを比較した結果、日本語学習動機や学習過程、教師の捉え方に日系アメリカ人と非日系アメリカ人で違いが認められるとし、その原因がエスニック・アイデンティティによる影響であることを明らかにした。そして、アメリカが多文化社会へと移行し、異文化理解教育が実施される中で、被調査者のライフストーリーにエスニック・グループを超えた幅広い交流や異文化への寛容な態度が表出し、それぞれのエスニック・アイデンティティは「個性」と尊重されながらも時と場合に応じた流動的なエスニック・アイデンティティが構築されていくのだと結論づけた。

本論文は、日系アメリカ人が辿った歴史、多文化社会へ移行しつつあるアメリカにおける中等教育の調査、EIQによる調査と先行データとの比較を通して世代間の意識の動向、さらに日系アメリカ人4世と非日系アメリカ人のインタビュー調査によるライフストーリー構築から導かれた分析結果を有機的に結び合わせて、日系4世の日本語学習動機の解明にとどまるのではなく、彼らのエスニシティについての意識やアメリカや日本の文化に対する認識までも明らかにしている。もっとも、壮大なテーマを扱う論文ではえてして細部の詰めが甘くなるが、本論文も例外ではない。また、本論の日系4世に関する分析結果は、調査対象が限定されているために全般的な傾向とは言い難い。しかしながら、それらの欠点はまた発展の契機ともなりうるし、その意味で中橋氏の場合さらなる発展が大いに期待できる。

このように本論文は、アメリカの大学の日本語クラスを受講する学生の学習動機の解明にとどまらず、日系アメリカ人論でもあり、さらにアメリカにおけるエスニシティやアメリカ文化研究としても評価できる研究である。

以上のように、本論文は、博士(言語文化学)の学位論文として十分に価値あるものと認める。